



感染症とたたかう

第17号

2017年
4月発行

発行：国立大学法人 長崎大学 監修：長崎大学病院 感染制御教育センター長・教授 泉川 公一
お問い合わせ：長崎大学熱帯医学研究所 〒852-8523 長崎市坂本1丁目12-4 TEL：095-819-7800（代表） FAX：095-819-7805

● 私たちの暮らしと感染症 ●

成人しても多い百日咳 ワクチンで予防することが重要



短くて激しい咳が数回続いたあと 「ヒュー」と音を立て息を吸う

百日咳は百日咳菌によって起こる急性の呼吸器感染症です。症状が治まるまでに数十日間かかることから、この名がついています。

百日咳の症状は、カタル期（約2週間）、痙咳（けいがい）期（約2～3週間）、回復期（2～3週間）の3つの期間に分けられます。

百日咳菌に感染すると、7～10日間程度の潜伏期を経て、普通の風邪症状で始まり、次第に咳の回数が増えて、咳の程度も激しくなります。これがカタル期です。

やがて痙咳期になると、コンコンという特徴の

ある短くて激しい咳が連続的に起こり（発作性けいれん性咳そう）、続いて息を吸うときに笛の音のようなヒューという音が出ます。夜間に咳き込むことが多く、この発作は数分～数十分続くことがあります。発熱することはあまりありませんが、嘔吐することがあります。

ただ、年齢が低いほどこうした特徴的な症状が現れにくい傾向があります。特に6カ月未満の乳児は息を吸い込む力が弱いため、特徴的な咳がなく、風邪とされている場合があります。

回復期では、激しい咳の発作は次第に減り、2～3週間で治まりますが、その後も時折発作性の咳が出ることもあり、完全に治るには2～3カ月かかることがあります。

百日咳の治療には、マクロライド系抗菌薬（工

リスロマイシン、クラリスロマイシンなど)が有効です。カタル期に治療を開始すれば痙咳期まで進行しないで治すことができます。ただカタル期の症状は風邪症状と見分けにくいので、百日咳と診断されないことも多く、治療は痙咳期になってからがほとんどです。この時期から抗菌薬を飲んでも「発作性けいれん性咳そう」は治まりませんが、本人が百日咳菌を周囲に出すのを防ぐ効果があります。そのため2週間くらいは飲み続ける必要があります。

かつては患者の8割が乳幼児 現在は半数が15歳以上に

百日咳は世界的に見られ、子どもに多い感染症です。世界保健機関(WHO)によれば、百日咳患者数は年間2000万~4000万人、その約90%は発展途上国の子どもで、死亡数は約20万~40万人とされています。特に乳児では重症化しやすく、死亡者の大半は1歳未満の乳児です。そのため、百日咳ワクチンを含むDPT三種混合ワクチン接種(ジフテリア・百日咳・破傷風)は、わが国を含め世界各国で実施されており、その普及とともに百日咳の発生数は激減しています。

わが国の百日咳患者数は、ワクチン接種開始前には年間10万人以上でした。1950年からワクチン接種が始まり、三種混合ワクチンが定期接種となって以降は患者数が減少し、1971年は206例、1972年は269例と、世界で最も罹患率の低い国の一つとなりました。

しかし、1970年代から、百日咳ワクチンによるとされる脳症などの重篤な副反応発生が問題となり、1975年2月に百日咳ワクチンを含む予防接種は一時中止となりました。その結果、1979年には患者数が約1万3000人、死亡者数は約



20~30例に増えてしまいました。その後、百日咳ワクチンの改良が進められ、DPTワクチンの接種率が向上、1998年には報告数が2708例に減少しました。

最近では百日咳ワクチンの接種を受けていない世代や、乳幼児期の予防接種の効果が減った成人の患者が増えています。感染症発生動向調査によると、2000年代の初めには5歳以下の患者が全体の約85%を占めていました。その後、乳幼児の割合が年々低下する一方、20歳以上の割合が増え、2016年には25%を占めました。また、2006~15年の10年間に医療機関を受診した百日咳の患者を年齢別にみると15歳以上が約6割と推計されています。百日咳は子どもの病気ではないのです。

成人の百日咳が問題となるのは、特徴的な症状が少なく、風邪との区別が難しいため、本人が治療を受けず、長い期間、無自覚で百日咳菌を排出している可能性があることです。

子どもが生まれたら、少しでも早く予防接種を受けましょう。生後3カ月から接種できます。接種間隔などについては、小児科などかかりつけ医に相談してください。

次号(2017年5月号)では
「夏の三大風邪」を取り上げます。